

原告 証言会

5月19日(土)午後4時から石川県教育会館において、原告の朱安国さん、王徳功さん、李変さんの証言会が開催されました。



朱 安国さん

出身は河南省原陽県で、今年 81 才になります。家は農業でした。家の食糧が全部日本軍に奪われて食べるものがなくなったので、やむなく原陽県の県城へ行って物乞いをしていました。道の向うで叫んでいる人がいた。「日本軍が来て人をつかまえている」「早く逃げないとあんたもつかまるよ」と言うので西門の方へ逃げて行きました。そこにも日本兵がいてつかまってしまいました。つかまえた人をみんな集めて女性、年寄り、子供は帰して若い男だけ残しました。馬に乗った日本兵がやって来て、「動くな、逃げたら殺すぞ」と脅した。その中に一人子供がいて 16 才と言ったら、「16 才なら帰せ」ということで帰した。私も 16 才なので、「私も帰らせてほしい」と言うと、「いや、お前はだめだ」と言われた。抵抗すると銃剣で私のお尻を突きました。そのあと私たちは馬を飼っている場所へ連れて行かれました。母親が心配して私がどこへ行ったのかとあちこち捜しまわって、最後にその馬を飼っている場所へやって来ました。私は母親が入口のところだったので行こうとしたら銃剣で阻止され、母親は入口のところに倒れて、ショックで気を失っているのが見えました。それが母親との別れとなってしまいました。そのあと馬を飼っている場所で 3 日程閉じ込められたままでした。食事は 1 回うすいおかゆが 1 碗で、1 日 3 碗のおかゆだけでした。そのあと駅へ連れて行かれ、両側を日本兵が銃剣を持って警戒し、軍用犬もいる中を列車の中へ連れて行かれようとなりました。私は列車に乗せられたら大変だと思い、列車の入り口を必死につかんで中に入らないように抵抗したら、銃剣で私の手を刺しました。その傷跡は今でも残っています。そして無理やり有蓋車の荷物を積む貨車に押し込められました。こうしてそこから済南へ運ばれました。済南へ行く途中は食べ物も飲み物も与えられませんでした。どれ位かかったかはっきり覚えていませんが、済南の駅に着くと日本兵が待っていて、護送されて新華院という収容所へ連れて行かれました。新華院は非常に大きくて周りに高い塀があって、鉄条網もあり、さらに塀の上には電気鉄条網があって、入り口は日本兵がずっと監視していて逃げようとしても逃げられませんでした。さらに周りには堀があった。新華院では 1 日 3 食、1 回にうすいおかゆが 1 碗出るだけでとてもおなかがいっぱいにならないのに、毎日山へ行って穴掘りの仕事をさせられました。そして体が動けなくなると隔離されて食べ物も与えられずたくさんの方が餓死させられました。毎日のように白い馬に引かせた馬車に死体を運ばせていました。いったいどこに運んで行ったのか私は分かりませんが毎日運ばれていました。そして 3 ヶ月間収容所に閉じ込められて、また送り出されました。そのときうすい綿入れの上

下と靴と、うすい掛布が支給されました。日本兵に監視される中、有蓋車に押し込められ青島へ連れて行かれました。青島では泊まることなくそのまま直接船に押し込められました。私たちが逃亡することを恐れてだと思いますが、乗るとすぐに船は岸を離れました。船が港を離れて7日後下関に着きました。下関で船を下りると服を脱がされ消毒させられ、列車に乗せられ七尾へと送られました。七尾に着いて住まわされた宿舎は木造の建物で上下二段に仕切った蚕棚の寝床で寝かされました。そのときは2つの隊があつて、1隊100人、20人で一つの班で、1隊には五つの班がありました。来てすぐに港で働かされました。朝は、夜が明けるとすぐ仕事に出されました。食事は米ぬかで作ったうすく蒸したピンズで、1食に2個、おつゆらしいおつゆもなく、おかずもなく、たまにうすい塩味のおつゆのようなものがありました。1回に2個ですが、10個食べてもおなかがいっぱいにならないものでした。それでも重い荷物を運びに行かなければなりません。「重い荷物を運べない」と言うと、「運べないなら食事は抜きだ」と言われるのでやむをえず必死になって担ぐしかありませんでした。その袋は200斤、100kgになります。当時、私は90斤、45kgしかありませんでした。とても100kgを担げるものではありませんでした。あるとき、船から渡し板を渡って荷下ろしの作業をさせられたときに、途中まで歩いたら揺れて荷物といっしょに落ちてしまいました。海から上がってくると監督はいきなりビンタを張って、足で蹴りとばしました。私たちがケガをしたとか生死がどうだということよりも、荷物を落としてダメにしたということで私たちに殴りつけたのです。そのとき板に腰を打ちつけて、それ以来腰と足が悪くなりました。それから歩くのもうまく歩けなくなりました。仕事に出るときは毎日宿舎から列を組んで歩かされるのですが、当時靴が破れて裸足だったので、風が吹こうが、雨や雪が降ろうが、冬場には凍りついたりして、列について行けなくて遅れると棍棒で殴られました。着ていた服は中国で支給された服のままです。七尾に来て服の支給はありません。傷んでいてもそのまま寒くなってどうしようもなくなると、麻袋を体に巻きつけるしかありませんでした。着替えがなく洗濯などできませんでした。夜寝るとき寒くて仕方がないので体を寄せあって抱きあって寝るしかありません。宿舎にはストーブなどありません。夏の暑いとき、監督が日蔭に入って休んでいたのに、私も日蔭に入って涼もうとしたら見つかって棍棒でひどく殴られました。七尾では船からの荷下ろし、倉庫への積み込み、列車への積み込みの仕事をさせられました。荷物は大豆、鉄、石炭などでした。お風呂へ入ったことはありません。衛生状況が悪く宿舎へ帰っても蚊が多く、ノミやシラミがいっぱいいて体のあちこちを刺されたりして、そこがかゆくて掻き破って膿んだりして、とてもひどかった。病気になる人も多く、また顔も洗えないという状況で、とりわけ失明する人が多かった。医者が診てくれたり薬をくれたりということは一切ありません。一日も休みの日はありません。大雨や大雪のときでも倉庫の中で仕事をさせられました。雪が降っても雪かきをして倉庫の中へ行きました。雪のためゆっくり歩くとまた殴られました。七尾ではまったく何も支給されませんでした。日本が負けたことは何も知らされず敗戦のあとも仕事をさせられていました。神戸から仲間が宿舎へ来ると、まだ現場で働かされているということであわてて現場へ来て、「なぜ、まだ働いているんだ。私たちはとつ

くに仕事なんてしなくなっている。日本はとっくに投降した。なぜ働いているんだ。」と言ったので、はじめて日本が負けたことを知ったのです。日本が敗戦になったので町に出ようとする、と、「町に出るな」と言われて止められた。賃金の支給はありません。アメリカ軍が入って来て中国人がここにいるとまずい、早く出そうということになったようで、七尾から列車に乗って、どこか忘れたが送られた。そこから船に乗って天津のそばの塘沽(たんくわ)という港に着きました。当時、天津に着いたら国民党が兵隊狩り、つまり兵隊をかたっぱしから集めていたので、七尾で亡くなった人の遺骨も一緒に持って行ったのですが、つかまっではいけないと思い、混乱している中でその遺骨もなくなってしまいました。天津からお金もなく汽車にも乗れないので、物乞いをしながら原陽まで歩いて帰りました。1ヶ月以上かけて家に着きました。家に着いたら誰もいませんでした。母は亡くなっていました。隣の人がかわいそうだと言ってごはんを食べさせてくれました。よそに嫁いでいた姉2人が、私が帰ったことを聞いてかけつけて来て3人で抱き合っ泣くしかありませんでした。姉の家で1ヶ月ずつ交替で面倒をみてくれました。あまりきつい仕事もできず、隣の家の手伝ったりしているうちにやっと自分の家を持てるようになりました。そのあと足と腰が痛みだして、重労働はもちろん、歩くことも困難になりました。

日本の政府、企業に対しては、きちんと謝罪して賠償してくれることを要求します。裁判官に公正な判決を出してほしい。